

夏の思い出「二枚の写真」

ジャーナリスト 尾崎美千生

「黙って立ち去った少年」

ここに古ぼけた二枚の写真がある。一枚は日本が太平洋戦争で負け、奈落の底に落ち込んだ直後の、死んだ弟を背負った少年の写真。あとの一枚はアフリカのスーダンでプロのカメラマンが撮ったうずくまる少女と、少女の死を待つハゲワシの今にも飛びかからんばかりの図柄である。

二枚の写真には時間的、空間的に何の脈絡もない。しかし、三〇年にわたって「人口問題」という人間存在のすべてが関わり合う分野に入り込んだわが身には、二枚の写真が重なって浮かび上がってくる思いに駆られるのである。

死せる弟を背負った少年の写真は、一九九九年六月、朝日新聞社が掲載した紙面企画「写真が語る二〇世紀『目撃者』展」の予告記事のなかの一枚である。論説委員の轡田隆史氏は次のように書いている。

「戦争が終わった直後の原爆の長崎である。大きな穴を掘っただけの火葬場で、いくつもの遺体が炎をあげて燃えていた。そこに少年が現れて、穴のへりに立った。背負っているのは死んだ弟である。作業をしていた男たちが、ひもを解いて小さな遺体を受け取ると、炎のなかに置いた。燃え上がる弟を見つめていた少年はやがて、黙って立ち去っていった」

原爆にこそ遭わなかったが、やはり長崎で、「国民学校」の二年生のときに敗戦を迎えた私自身がこの少年に重なって来る。死の重みを加えて反り返る弟を斜め十字に結んだ帯でしっかり支えている。あるいは重傷を負った母親が、もはや息を止めた小さなわが子が道中で兄の背中からズリ落ちないように、帯を締める手に力をこめたのかもしれない。

少年自身も火の中を歩いて来たに違いない。「気をつけ」をした裸の素足が腫れている。食いしばったくちびると遠くを見つめる眼差しが、不意に天から降ってきた「途方もない運命」に必死で耐えようとする気持を表している。しわの寄った半ズボンにきちんと添えられた右手が、弟をあの世に無事に送り届ける使命感を示しているかのようである。このあと、「黙って立ち去った」少年はどこへ行ったのだろうか。その行く先にどんな運命が待ち構えていたのだろうか。

「経済大国への道」

原爆やB29の空襲で失われた多くの幼い命は無残である。しかし偶然に生き残った者たちにもまた厳しい戦後が待っていた。一九九五年六月の『毎日新聞』の記事「戦後五〇年 暦の断層」によれば、「一九四五年一二月一五日、この地下道で二五〇〇人の

浮浪者が一斉収容された。当時、上野駅では多い日には1日六人の餓死者が出た」。いま筆者が教壇に立っている大学の学生達にこんな“昔ばなし”をしても怪訝な顔をされるばかりであろう。

戦後もアジアの隣国では「朝鮮戦争」や「ベトナム戦争」の悲劇があった。しかし、日本は幸いにもと言うべきか、再び戦争の当事者にはならず敗戦の灰燼のなかから立ち直り、復興を遂げた。「子どもにいい教育をしたい」という賢い母親たちの一念が、家族計画運動を通して「多産多死」から「少産少死」への人口転換を促した。その間に私たちに押し寄せてきた食糧難や住宅難、それにいまアフリカで猛威を振るっているエイズのような「不治の病」とされた結核や、寄生虫などの感染症から次第に開放された。

日本は復興資金として「ガリオア・エロア資金」の援助を受け、子どもたちは「ララ」（公認アジア救済機関）や「ケア」（地球規模の支援および救援組合）や、「ユニセフ」（国連児童基金）からの贈り物で栄養失調を免れた。「従属人口指数」である子どもの数が減ることによって一家の家計簿が豊かになり、国の経費負担が減る「人口ボーナス」の働きによって、日本はひたすら「経済大国」への道を歩み続けた。

だが「成功は失敗の基」なのか—いま日本の社会は飽食の果てに、戦争ではなく、肉親・親子同士が殺し合う殺伐たる風景に見舞われている。日本経済を高度成長に導いた人口転換の成功は、その裏返しである少子高齢化の波を引き寄せ、年金や介護など社会保障財政を苦境に陥れている。

原爆で弟を失ったあの少年もうまくラッキーな「日本のコース」に乗れただろうか。そして老境に入ったいま、戦後の歩みをどう反芻しているだろうか。最近の世相の変わりようをどう受け止めているだろうか。

「ハゲワシと少女の運命」

もう一枚の写真。そう、ハゲワシに狙われたスーダンの幼児はうまく難を逃れただろうか。米国ロックフェラー大学のジョエル・コーエン・人口学研究所主任教授の講演を特集した記事の中で、この写真を掲載した一九九九年一〇月の『毎日新聞』は次のように解説している。

撮影者は『ニューヨーク・タイムス』紙と契約していた南アフリカの写真家、ケビン・カーター氏である。同氏が一九九三年一〇月スーダン南部で撮影したこの写真は、『ニューヨーク・タイムス』の一面を飾り、九四年度のピューリツァー賞を受賞した。しかし、その後この写真をめぐって「写真家は撮影以前に少女を助けるべきだった」という報道のモラルを問う批判が巻き起こった。これに対して『ニューヨーク・タイムス』は「撮影者の報告では、ハゲワシが追い払われてから、少女は再び歩き始めるまでに回復した」という異例の「おことわり」を掲載した。しかし、撮影者自身は寄せられた批判に何ら反論することなく間もなく排ガス自殺をした、と同紙は伝えている。

いま我々が住む「宇宙船地球号」には七〇億人が乗り組んでいる。幸いなるかな、二

○世紀の後半に開発途上国で起こった「人口爆発」は、出生率に関する限り下降線をたどりつつある。世界の人口学者の中にも「もはや人口爆発は終わった。これからは少子高齢化こそが人口問題の核心だ」と考える意見も多い。だが、人口現象の中には「人口のモメンタム」(弾み)や「人口のイナーシャ」(慣性)と呼ばれる現象がある。七〇億人まで膨れ上がった世界の人口は、出生率は下がっても過去に残された絶対数の大きさの故に今後もしばらくは増え続ける。国連の推計では二一世紀に入ってからでも当分は年間八〇〇〇万人から八三〇〇万人が増え続け、二〇五〇年の世界の総人口は約九五億人に達するだろうと予測している。満員電車の中にさらに三五億人が乗り組む「地球号」は果たして十分な扶養力を維持できるのだろうか。

相次ぐ異常気象は人間活動による地球温暖化の一環であるという見方がある。引き続き開発途上国の人口増加と経済活動の活性化によって、世界の食料や、エネルギー市場に大きな需給ギャップや格差が生まれ、それらが世界の平和秩序を乱し、大きな紛争を招くことはないだろうか。わが国における人口学の泰斗・故黒田俊夫博士は「さらに三五億人が加わる二一世紀前半の 50 年間こそが、人類生存の分かれ道」という警鐘を鳴らして九七歳でこの世を去った。

「援助小国への道」

七〇億人の地球人口のうちおよそ一〇億人は満足に一日の食欲を満たせない人々である。あとの一二億人は一日二ドル以内で暮らしを維持している人々である。これだけ貧富の差が拡大してしまった世界ではおよそ平均的な数字は意味をなさないだろう。スーダンでハゲワシに生身を奪われる少女ばかりではない。貧困のゆえに同種の動物である人間によって売買の対象となり、悲惨な運命を背負わされる子どもたちは正確な数字さえ掴めないのである。

かつては世界の「援助大国」であった日本は、二〇〇〇年代に入ってから先進国では唯一、開発途上国に対する政府開発援助 (ODA) を減らし続けている。経済協力開発機構 (OECD) の開発援助委員会 (DAC) の調べによると日本は ODA による援助実績総額で英国に抜かれ、米、英、に次ぐ世界第三位に転落した。このままで行くと一〇年後には独仏両国にも抜かれ、第五位をイタリアと争う地位に後退するのは必至と見られている。国際社会はずっと以前から開発途上国の自立を助けるため、各国の国民総所得 (GNI) に対する ODA の割合を 0.7% に高める公約をしている。北欧の国々ではすでにこの目標を実現している国も多く、西欧諸国も国連が掲げる貧困削減のための「ミレニアム開発目標」の実現に向け数年内に 0.7 目標を達成する方針を打ち出している。

しかしわが国は〇六年の OECD 発表でも 0.25% で、DAC 二二か国中十八位に甘んじている。国際援助協調の世界での日本の低迷の背景には、米国やヨーロッパには 9・11 の米国同時多発テロ以来、「貧困はテロの温床になる」との認識が深まり、一時の「援助疲れ」からの脱出を図る勢いを見せている。これに対し日本は財政再建の一

環として〇七年から五年間で一般会計の ODA 予算を 2～4%削減する方針を決めている。こうした ODA 削減の影響は国際社会のなかでの日本の存在感(プレゼンス)を薄めている。すでに世界保健機構 (WHO) の事務局長選挙で日本人候補が中国人候補に敗れたり、これまで日本人専門家が一貫して勤めてきた国連人口基金 (UNFPA) の事務局次長のポストが他国に回されたりするケースも出始めている。

財政難もさることながら、政治家たちが「隣近所で仲間がリストラに遭っているときに、なぜ他国の人を助けるのか」という選挙民の声を無視できないからである。しかし、学校現場では「いじめ」で子どもの自殺が相次ぎ、「子どもが子どもを」殺している。自宅に籠って子どもたちが夢中になっているゲーム機の中で、殺されても簡単に「リセット」できるバーチャル・リアリティが現実社会のなかにはみ出してきているのではなかろうか。フィリピンのゴミの山「夢の島」で、パンツも真っ黒にして一日の生活の糧を稼ぐ幼い子どもたちの姿を見慣れていけば、神戸での「酒鬼薔薇事件」は起きなかったのではないだろうか。途上国を含めて世界の現実には絶えず目を開いておく政治家の国際性がいま問われているのではあるまいか。

「マルサスの亡霊」

人間が発明した生産手段の拡大によって、一八世紀末に古典派の経済学者、ロバート・マルサスが唱えた「幾何級数的に増加する人口と、土地の制約などで算術級数的にしか増えない食料の差によって、人類はやがて大規模な飢餓や、疫病に見舞われるだろう」という不吉な予言は回避されるかもしれない。しかし、少なくとも「マルサスの亡霊がアフリカ大陸をさまよっている」と言える現実の世界がそこにある。敗戦の灰燼の中から立ち上がってきた私たちが、その過程で他国から得た支援に報いていくためには、ODA だけでなく、市民社会や企業、自治体が協力する「オールジャパン」体制で、戦後の経験を途上国の自立支援に役立たせる道をもっと積極的に進めていくべきである。

内向きなナショナリズムに陥るのではなく、世界に向けてこそ美しく、品格のある国の姿を示していくべきではなかろうか。原爆で亡くなった日本の少年と、ハゲワシの餌食になったであろうスーダンのいたいけな少女は、どちらも人間による、人間の死なのである。二枚の写真が私のイメージのなかで重なったのはそのためである。

(元毎日新聞政治部副部長)